

留学生のための日本語アカデミックライティングラボ 2022 年度活動報告書

2023年3月31日

古城一樹・下中隆太郎・田村豪・松元実環・井上高輔

神戸大学グローバル教育センター

目次

1. はじめに.....	2
2. 2022年度ラボの活動の概要.....	2
2. 1. 実施の体制.....	2
① 基本事項（場所、対象、時間帯、チューター数、期間）.....	2
② 利用の原則.....	3
③ チューターの組織（属性、勤務方法、ミーティング、研修、空き時間の活動）.....	4
④ 指導（セッション）の流れ.....	5
2. 2. 今年度の特徴.....	5
① 前期と後期の勤務形態・利用者の受け入れ態勢.....	5
② 他大学への訪問.....	6
③ 定期ミーティングについて.....	6
2. 3. 新人チューター養成.....	7
① 新人受入れの背景と新人研修の内容.....	7
② 新人チューターの感想と相談内容.....	9
2. 4. 実施の状況.....	10
① 利用件数と稼働率.....	10
② 利用者の属性.....	11
③ 課題の性質.....	12
④ セッションにおける検討事項.....	13
⑤ ラボを知った経緯.....	14
3. 利用者アンケート.....	14
4. チューターの振り返り.....	15
4. 1. 前期の学期末ミーティング.....	15
① チュータリングの技能について.....	15
② ラボの運営について.....	16
4. 2. 後期の学期末ミーティング.....	17
① チュータリングの技能について.....	17
② ラボの運営について.....	19
5. おわりに.....	20
【参考文献】.....	22

【資料】

1 セッション終了後の利用者アンケート 質問項目と回答結果

2 ウェルカムシート 3 まとめシート

4, 5 セッション観察・振り返りシート

チラシ類

【執筆担当】

古城一樹（神戸大学大学院人文学研究科博士課程前期課程院生）	: 2.1 節、2.3 節
下中隆太郎（神戸大学大学院国際文化学研究科博士課程前期課程修了生）	: 2.2 節②、4 節冒頭、4.2 節
田村豪（神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程院生）	: 4 節冒頭、4.1 節
松元実環（神戸大学大学院国際文化学研究科博士課程後期課程院生）	: 2.2 節冒頭、2.2 節①・③
井上高輔（神戸大学グローバル教育センター特命助教）	: 1 節、2 節冒頭、2.4 節、3 節、5 節

1. はじめに

本報告書は、神戸大学グローバル教育センター（旧国際教育総合センター）が日本学生支援機構委託事業として受託した「兵庫国際交流会館における国際交流拠点推進事業」（通称 G-Navi、事業期間：2019～2023 年度）の一環として実施された「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ」の 2022 年度の活動について報告するものである¹。

本報告書は 2022 年度チューターとして勤務した神戸大学の大学院生・修了生 3 名と、ライティングラボを含む事業のコーディネートを担当した教員である井上高輔（グローバル教育センター）が、これまでの活動報告書の内容・体裁を踏襲しながら適宜構成と構成内容を調整し執筆した。まず、執筆者で 2022 年度報告書の構成と構成内容について検討し目次案を作成した。そして、各箇所について執筆担当を割り当てた。執筆担当の割り当てについては、前ページの【目次】下に掲載している。

以下、第 2 節で 2022 年度のラボの実施体制と特徴及び新人チューター研修、実施状況のデータを示したうえで、第 3 節で利用者アンケートの結果を示し、第 4 節でチューターの振り返りについて報告する。第 5 節では締めくくりとして、担当教員から所感を述べる。

2. 2022 年度ラボの活動の概要

本節では最初に 2022 年度のラボにおける実施体制を概観した上で、今年度の特徴的な体制や活動について説明する。そして、新人チューター研修の内容について紹介し、最後、利用者から得られたデータとチューターの残した記録を基に実施状況データをまとめる。

2. 1. 実施の体制

① 基本事項（場所、対象、時間帯、チューター数、期間）

2022 年度前期のラボは新型コロナウイルス感染症拡大の影響を大きく受けたため、Zoom と Google Drive を使用したオンラインでの活動を実施した。2022 年度後期のラボは前期同様、オンラインでの活動を基本的に踏襲したものの、一部日程のみ、2019 年度後期までにラボの活動拠点として利用していた兵庫国際交流会館において対面での活動を再開した（詳しくは後述）。

支援対象者は「兵庫県下の大学等の留学生」であり、兵庫県に所在地を置く大学や大学院等に在籍する、日本語を第二言語とする者を指す。「留学生」と書かれているものの、対象者の所属する課程は「学部、修士、博士、交換留学生、研究生、教員／研究者、その他」と幅広く、利用資格は必ずしも学籍を有する者に限定されない。また、今年度は前年度と同様、オンラインでの実施という要因もあり、兵庫県外

¹ 本ラボと G-Navi の趣旨、基本的な枠組みについては、森田（2019a・b）を参照されたい。ラボの 2017、2018 年度の活動については森田（2019a）、2019 年度の活動については井上ほか（2020）、2020 年度の活動については松元ほか（2021）、2021 年度の活動については杉原ほか（2022）でそれぞれ報告されている。

からの利用者が見られた。セッション中の会話で使用する媒介言語は基本的に日本語を想定していたが、日本語運用能力の習熟度が低い利用者には英語を時折用いるなどの対応を行った。

チューターの勤務時間は事前準備と事後の振り返りを含み、1日あたり基本4時間（15時30分から19時30分まで）である。1コマあたりのセッションの時間は45分であり、セッションは1日に3コマ（16時～16時45分、17時～17時45分、18時～18時45分）設定された。各コマの間には15分の空き時間を設けており、この時間は指導記録用フォームである「まとめシート」の記入や休憩、利用者の入れ替わりなどに充てられた。また、オンライン活動への移行に伴い、大学のキャンパスから兵庫国際交流会館への移動が不要になったため、2020年度に勤務時間が変更されたが（松元ほか2021；6）、兵庫国際交流会館での対面活動においても前述の勤務時間で運営された。

【表1】は2022年度に活動したチューターの数を示している。なお、表中にある「経験者」とは当該の学期の時点で既に1学期以上チューターとしての勤務経験を有している者であり、「新人」はその学期に初めてチューターとして活動を始めた者を意味する。ただ、後期は週に2日担当するチューターがいたため、合計チューターの数と実際の人数に差がある。また、授業等との兼ね合いで2コマ目からセッションを担当しはじめるチューターもいたが、表中には示していない。

【表1：2022年度のチューターの数】

期間	チューターの総数	各曜日のチューターの数		
前期	7人 (経験者6、新人1)	月曜3人	火曜2人	金曜2人 (新人1)
後期	10人 (経験者7、新人3)	月曜5人 (新人1)	火曜3人 (新人1)	金曜3人 (新人1)

※カッコ内の数は内数

なお実際の利用件数や利用者の属性、課題の性質、セッションにおける検討事項といったデータは第2.4節にて扱っている。

② 利用の原則

本ライティングラボにおいて支援対象となる文章の種類はこれまでと同様に、日本語の授業において課された作文、講義・演習のレポート、論文（学位論文・投稿論文）、発表の資料（配布レジュメやプレゼンテーションのスライド）、その他の文章（研究計画書など）といった、日本語で書かれた学術的な活動に係る文章である。ただし、就職活動に際したエントリーシートや履歴書など、学術的な活動に関連しないとみなされる文章は本ラボでは扱わなかった。

また、ラボ利用希望者のセッション予約手順は次の通りである。まず、利用希望者はG-Naviウェブサイトのオンラインフォームからセッションを予約する。そして、セッションがオンラインの場合、利用希望者はZoomに入室し、ブレイクアウトルームに分かれた後にチャット機能を用いて文書を送付し、セッションを開始する。一方、セッションが対面の場合、利用希望者は事前に教員にメールで送付し、当日、

Zoom ミーティングルームに入室してセッションを開始する。また、利用希望者 1 人あたりの予約可能枠については、1 日 1 コマであり、2020 年度以降、原則として 2 コマ連続のセッションは実施していない²。

なお、文章チュータリングの理念に係る点は「書き手のオーナーシップを護」りながら自立した「書き手を育てる」ことを目指している（佐渡島・太田編 2013：2-10）。この理念に沿って、チューターは文章作成の様々な段階において書き手である利用者と一方的な添削にならないように対話を行いながら支援する。

③ チューターの組織（属性、勤務方法、ミーティング、研修、空き時間の活動）

2022 年度のライティングラボを組織したチューターは、神戸大学大学院の国際文化科学研究科所属学生および元所属学生、人文学研究科に所属している学生である。

当日のチューターの動きは以下の通りである。まずチューターは、担当曜日の 15 時 30 分に「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ」の Zoom ミーティングに入室し、予約・資料等の確認を行う。次に、全員で予約情報の概要（専門分野・ライティングラボ利用歴等）を確認し、担当を決めるあるいは、あらかじめ割り振られた担当の確認をする。そして担当者決定・確認後は、各チューターが個人ファイルに目を通す、引き継ぎを行うなどしながら、1 コマ目のセッション開始まで待機する。なお、セッション終了後には次のセッションまで、15 分間の空き時間があり、その間に各自で「まとめシート（後述）」の記入も行ったたり、休憩を取ったりした。3 コマ目終了後は、チューター全員でその日のセッションに関する情報共有を行い、各チューターが記入した「まとめシート」をオンライン上で共有し、19 時 30 分に退勤する。以上が、チューターの動きであるが、後期金曜日のチューターに関しては 15 時 30 分に兵庫国際交流会館に集合・勤務開始であったため、予約・資料等の確認は対面で行い、Zoom ミーティングへの入室は 16:00 までに行い、セッションを始めた。

2022 年度の前期は、ライティングラボにて利用者を受入れる前の時期に顔合わせ会を行い、チューター間の親睦を深めた。その後は、オンラインでのセッションの実施要領の確認と、ライティングラボの実施体制、ルール、指導の理念、新人チュータートレーニングの内容・ライティングの要素に関する知識等の紹介、新人チューターとの質疑応答や相談を行った。また、2022 年度前期ラボ実施期間中は、計 4 回のミーティングを行った。第 1 回と第 2 回は新人チューターの模擬セッションを中心に行い、第 3 回と第 4 回はセッション時の悩みや相談を参加者同士で共有した。加えて、前期・後期ともに、学期末ミーティングを行なった。セッションの担当のないコマ（空き時間）の活動としては、セッション観察、個人ファイルのチェックによるセッション準備、書籍やネットを利用したライティング関連の資料収集・読解、セッションや文章についての検討などを行った。

² ただ、利用希望者が 2 コマ連続のセッションを要望した際に、チューターがセッション 2 コマ分の空き時間を確保できていたために、利用希望者の 2 コマ連続のセッションを受け入れたことがあった。

④ 指導（セッション）の流れ

45 分間のセッションの流れは、次の通りである。まず、セッション開始前に、チューターは予約情報と利用者の情報を確認する。その際、利用者がこれまでにラボを利用したことがあった場合には、チューターは以前のセッションで用いた「ウェルカムシート」や「まとめシート」、文章等に目を通した。「ウェルカムシート」とは予約時に利用者が記入したものであり、「まとめシート」とはセッション終了後に振り返りと次回のセッション担当者への伝達事項を記入するものである。また、これまでに同一の利用者を担当したあるいはセッションを観察したことのあるチューターが同日の勤務にいれば、チューター同士で指導の方法や文章の内容について検討した場合もある。

セッション開始後は、オンラインセッションで利用者から録画の許諾が得られた場合には録画を開始する。そして、検討する文章を Zoom のチャット機能によってチューターに送ってもらい Google Drive 上で共同編集可能なようにセッティングする³。利用者とチューターの双方が文章ファイルを開きつつ、「ウェルカムシート」によって課題の種類、段階および利用者が検討したい点を確認する（導入）。次に、文章を一読して問題点をチェックし（文章診断）、セッションの目標や問題の優先順位を決める（目標設定）。次いで、利用者の意図や改善策を引き出す対話を行いながら、ライティングの各要素を意識しつつ文章の検討をすすめる（文章検討）。セッション終了間際には、チューターは「まとめ」として、扱った内容や今後すべきことを確認する。セッション終了後、チューターは「まとめシート」に指導の内容を記録し、使用した文章やメモとともに Google Drive 上のファイルに保管する。セッション終了後、教員はセッションで用いた文章メモ URL とアンケートフォーム URL の入ったメールを送付する。

2. 2. 今年度の特徴

本節では、2022 年度のライティングラボの特徴として、①前期と後期の勤務形態・利用者の受け入れ態勢、②他大学への訪問、③定期ミーティングについての 3 点について述べる。

① 前期と後期の勤務形態・利用者の受け入れ態勢

2022 年度前期の勤務形態としては、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、昨年度から引き続き兵庫県国際交流会館 1 階の Nadacom Station が使えなかったため、Zoom と Google Drive を使用したオンラインでの活動を実施した。

また、昨年度同様に基本的にはオンラインセッションの形式を採用したものの、勤務場所が神戸大学グローバル教育センター内になった理由としては、2021 年度までは、コロナ禍における勤怠管理の特別ルールにより、神戸大学職員の在宅勤務が許されていたが、今年度から神戸大学のコロナ禍における勤怠管理の特別ルールが無くなったことによりチューターの在宅勤務が不可能になり、チューターは管理者たる教員の元でなければ勤務できないという以前の慣習に戻ったことがある。

2022 年度後期の勤務形態は、前期同様にオンラインでの活動を基本としつつ、一部日程（週 3 日の内、金曜のみ）で、2020 年度以前のラボの活動拠点として利用していた兵庫県国際交流会館において対面での活動を再開、さらにオンラインでの対応も行う「ハイブリッド型」での活動を行なった。

³ 対面利用の場合は、教員が文章ファイルを受け取りセッティングした。

② 他大学への訪問

ここでは、2022年11月3日（木）に実施された、関西学院大学ライティングセンター（以下関学ライティングセンターと表記する）との交流会について実施概要とラボのチューターにとって印象的だった点を紹介する。

この交流会はそれぞれの取り組みについて知り、相互交流を深めることをねらいとして開催された。実施場所は関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス内と図書館のライティングセンターで、14時から16時まで実施された。ラボの教員1名とチューター4名が関学ライティングセンターを訪問し、前半部では施設見学とヒアリング、後半部では情報・意見交換を行った。具体的には、前半部ではラボの教員とチューターが、関学ライティングセンターの教員と契約助手、そして教育指導員⁴による案内を受けながら施設を見学した。続く後半部では「座談会」と称し、関学ライティングセンターの教育指導員とラボのチューター同士で、互いの組織やチュータリングのあり方についての意見交換や質疑応答を行った。

ラボのチューターにとってもっとも印象的だったのは、扱う文章の性質及びセッションの検討内容の相違であったと言えるだろう。関西学院大学では、正規の学部生のみを対象としており、レポート作成に関する初年次教育の一環として、ライティングセンターを利用する学部1年生が多いそうである。そのため、持ち込まれる文章の多くが概ねA4用紙1ページから2ページの課題レポートであり、セッションでは、構成、論理、参考文献を検討してほしいという要望が多いとのことである。それに対して神戸大学では、大学院生の利用が大半である。それに伴って、持ち込まれる文章の性質も、学位論文や投稿論文など論文が多く、分量も多めで、検討内容も日本語表現・文法が中心である。このような相違点から、ラボでは、日本語表現・文法という利用者側のニーズに対して、構成や論理などに改善点をチューターが見て取った場合、チューターが葛藤を感じる場合が多く、このことが留学生を対象とするラボの特徴である点が浮かび上がった。

総じて交流会は、ラボの活動を客観化し、チューターもさらなる技術の向上に向けて刺激を得る有意義な機会になった。

③ 定期ミーティングについて

2022年度は、前期は、勤務期間中に4回のミーティングを行なった。後期は、定期ミーティングを行わなかった。以下、前期のミーティングについての詳細と後期のミーティングに代わる活動について述べる。

A. 前期の定期ミーティング

2022年度前期の定期ミーティングは4回行われた。具体的な日程は、6月16日木曜日の12時から13時、6月29日水曜日の15時から16時、7月14日木曜日の12時から13時、8月3日水曜日の15時から16時である。参加者は、6月16日木曜日は、チューター3名、教員1名の、計4名、6月29日水曜日は、チューター2名、教員1名の、計3名、7月14日木曜日は、チューター4名、教員1名の、計5名、8月3日水曜日は、チューター5名、教員1名の、計6名だった。ミーティングは対面で実施された。

⁴ 関学ライティングセンターにおいて学術文章を1対1で指導するスタッフ。ラボでいうチューターに相当する。

前期に行われた4回のミーティングの具体的な活動内容としては、前半2回の日程(6月16日、29日)で、新人研修と模擬セッションを行い、後半2回の日程(7月14日、8月3日)でセッション情報の共有と運営相談を行なった。

各曜日の活動内容や利用者情報の共有は、各チューターがセッションを担当する際のスムーズなセッションの進行にもつながった。

B. 後期の定期ミーティングに代わる活動

2022年度後期は、定期ミーティングを設けなかった。この理由としては、ミーティングの日時設定が難しかったことが挙げられる。後期は、在宅勤務が不可であったため、定期ミーティングのためだけに集合するのは、チューターによっては負担が小さくないと判断し、定期ミーティングの代わりに、前期から利用していたGoogle Driveの「相談事項メモ」を活用し、そこに各自記入することで状況の把握を図った。加えて、「空きコマの活動」として、録画したセッションの様子をチューター同士で観察し合うことで、セッションに関する情報交換を行うこともあった。

このような形式を採用した理由としては、前期の学期末ミーティングにおいて、「後期は、定期ミーティングなしの形式を試してみ、本当にしで問題ないか考えてみる。必要な場合は、なぜ・どう必要なのか、詳しく考える。」としたことがある。これを受けて、「定期ミーティング無し・相談事項メモ継続使用・録画の観察実施」という形式で後期の情報共有体制を試行することとなった。それに伴って、後期のまとめシートを書く際に、「定期ミーティングがなかったことについて思うところや感想」が任意記述項目として挙げられた。

これらの方法を用いて、「定期ミーティング」に代わる情報共有体制を試行した結果、情報共有不足に陥らない程度には確立できたと考えられる。

2. 3. 新人チューター養成

次に、本節では今年度実施された新人の受け入れと新人研修を説明する。今年度の新人チューターの受け入れ人数は、前期1名、後期3名であった。なお、新人チューター研修は前期と後期どちらも実施された。以下、その研修内容について紹介し、省察する。

① 新人受入れの背景と新人研修の内容

まず、新人受入れの背景を説明する。2022年度当初の計画では、「前期8名、後期8名」がチューターとして勤務する予定であったが、実際に前期に勤務したのは7名であり、その内、前期から引き続いて後期にも勤務希望を出したのは4名にとどまった。このように、後期の活動開始時期には勤務チューターの数に若干の余裕が生まれていたため、前年度に引き続き今年度のラボでも同様に後期からの新人チューターの受け入れを実施した。

次に、新人研修の内容を説明する。今年度の新人チューター研修は、前年度に引き続き①既有知識や勤務中に体験的に得た情報を整理しつつ、②そこから新しい知識へ理解を広げていくような流れで行った。理由としては、このような流れが学習として自然であり、ラボの理念の理解につながると考えたためである。なお、具体的な研修活動としては、前期・後期ともに以下の活動を基本事項として実施した。

(1) 模擬セッションの観察 (1~2 セッション)

経験者チューターの 2 人が利用者役とチューター役のそれぞれに分かれ、利用者側の文章を検討する作業であるが、これは利用者受け入れ前の準備段階として実施しているチューターどうしのセッションである。新人チューターはこのセッションを観察し、セッションの流れの把握を目指す。

(2) 模擬セッションの利用者役で参加 (1~3 セッション)

次に、新人チューターは利用者役で模擬セッションに参加する。このセッションで、新人チューターは経験者チューターから実際に文章を検討してもらうことにより、セッションの流れの把握と利用者側の心情を理解する事を目的とした。

(3) セッション観察 (5~10 セッション程)

新人チューターはこの段階で非母語話者とのセッションを初めて経験する。この作業を通じて、新人チューターはセッションの流れ、ラボの理念・姿勢・方法について最終確認を行い、さらに非母語話者とのセッションの様々なバリエーションに触れることがねらいである。例えば、利用者の属性や日本語レベル、文章の種類・段階、初回利用者か利用経験豊富か、先輩チューターごとの個性等を観察を通じて新人チューターに感じてもらう。

(4) 「アカデミックライティングの諸要素」と「文章チュータリングや留学生とのやり取り」の把握

これは一定数のセッション観察を体験した新人チューターが行う作業であり、「新人チューター研修ワークシート」が用いられた。なお、このワークシートは「アカデミックライティングの諸要素」と「文章チュータリングや留学生とのやり取り」に関する知識の整理・展開を目指して作成されている。

このように、模擬セッションや実際のセッションの観察、体験を通して、セッションの流れや求められる姿勢、使用される方法、アカデミックライティングに関する知識をある程度把握し、それをワークシートで整理・展開することで、必要と思われる知識の獲得を試みた。以下、(1)から(4)までの作業に関して若干の補足を行う。(1) 模擬セッションは曜日ごとの勤務が始まってから 1~2 週間程度行われており、このセッションは利用者を受け入れずに、勤務の流れの確認やセッションの肩慣らしなど、全チューター対象の研修期間として設定されている。なお、(2)の作業における利用者役のチューターは、自身が執筆中、あるいは過去に執筆した学術文章を対象として、模擬セッションを行う。また、模擬セッションの観察における利用者は日本語母語話者であるため、実際のセッションに比べかなり性質が異なるようにみえるが、セッションの流れ自体は決して異なるものでなく、流れを把握することが期待できる。それに対し、実際のセッションの観察は、セッションの流れ、ラボの理念・姿勢・方法についてはもちろん、非母語話者とのコミュニケーション方法についても気づきを得る機会となる。また、(3)のセッションの観察では、新人チューターは「セッション観察・振り返りシート」(巻末の【資料4】)に記入を進め、観察後は記入を終えた「セッション観察・振り返りシート」を経験者チューター・教員とともに見ながら、気づいたことを共有する。これによって、セッションの基本的な流れや時間の使い方については把握することができる。加えて、チューターの用いる方法について気づいたことを確認し、その意図やねらいについて話し合うことで、新人は方法そのものだけではなく、その背景となっているチューターとして求

められる姿勢やラボの理念についての理解を深めていく。また、上記のように(4)の作業はセッションをある程度消化した後に行われた。その理由は、既有知識及びセッション観察の体験で得た知識をメモ・整理するためである。また、その際に教員とワークシートの内容を確認し、教員からの質問や説明を新人チューターは受けることで、必要と考えられる知識をおさえることができた。

② 新人チューターの感想と相談内容

今年度の新人チューター4人の感想や相談内容を確認するにあたって、まず、前年度の新人チューター研修について挙げられた問題点を確認する。第一は前年度の研修内容・手順に関するものであり、「手厚いが、先にいろいろと「方法」を学ぶのは、実感を伴いにくい、頭でっかちになるという面もあるという意見（杉原ほか 2022：7）」が挙げられた。そのため、今年度は既有知識や勤務中に体験的に得た情報を整理しつつ、そこから新しい知識へ理解を広げていくような前年度の研修を踏襲し、かつ新人研修ワークシートをある程度抽象的な段階で済ますことで、このような課題はある程度克服されたように思われる。

また、第二の課題はワークシートの内容についてであり、「どういう記述が求められているのか最初戸惑った」という意見が挙げられていた。これに対しては、新人研修ワークシートの指示内容・意図の記述を詳しくすることで改善を図った。第三の課題はセッション中における課題であり、「この場合自分だったらこう言うが経験者チューターなら何とと言うか」が聞ける機会がほしいという意見が挙げられていた。この課題は前年度と同様、今年度も見られており、新人チューターは必ずと言っていいほど感じてしまう悩みであるだろう。ただ、今年度は対面業務が多かったためある程度解消されているように感じた。また、今年度はこれらに加えて、A. 研修期間をやや短めに設定し、模擬セッションにおけるチューター役を早めに経験する、B. ワークシート等で「この場合自分だったらこう言うが経験者チューターなら何とと言うか」を聞ける機会を作る事が行われた。A. は早めに模擬セッションを体験することで心理的なハードルを下げるためである。B. については、今年度は Google Drive 上に相談メモという場を設け、新人の相談内容を経験者チューターと共有するという試みが行われた。このように、新人チューター研修は A. と B. の対策を行いながら、新人チューターの悩みや課題をできるだけ解消するということが重要であると考えており、来年度もこれらの活動を引き続き実施する。

2. 4. 実施の状況

本節では、セッションの実施状況について、利用者から収集したデータとチューターの残した記録を基にまとめる。

① 利用件数と稼働率

ラボの各期間の利用件数と稼働率は【表 2】の通りである。

【表 2：ラボの各期間の利用件数と稼働率】

期間	設置セッション数 (回)	利用件数 (件)	稼働率 (%)
2017 年度前期	114	48	42.1%
2017 年度後期	114	133	116.7%
2018 年度前期	204	102	50.0%
2018 年度後期	304	235	77.3%
2019 年度前期	270	68	25.2%
2019 年度後期	342	205	59.9%
2020 年度前期	102	58	56.9%
2020 年度後期	222	103	46.4%
2021 年度前期	136	90	66.2%
2021 年度後期	223	149	66.8%
2022 年度前期	161	98	60.9%
2022 年度後期	253	134	53.0%
計	2445	1423	58.2%

2022 年度利用件数は、前期は昨年度よりも 8 件増加し、後期は 15 件減少している。稼働率は前期・後期ともに昨年度よりも減少している。

前期の利用者は 31 名、延べ利用件数は 98 件、稼働率は約 60.9%であった。昨年度前期（34 名・延べ 90 件利用・稼働率約 66.2%）に比して同程度の利用があったと言える。また後期の利用者は 40 名、延べ利用件数は 134 件、稼働率は約 53.0%であった。昨年度後期（43 名・延べ 149 件利用・稼働率約 66.8%）に比して利用はやや減退したと言える。

なお、後期は月・火・金の内、金曜だけオンラインでも対面でも利用可能とした。表には示していないが、オンラインでの利用件数は 37、対面での利用件数は 15 であった。

利用率をおよそ月単位で区切って表したのが【表 3】である。

【表3：およその月単位での利用率】

期間	利用延べ数（件）	設置セッション数（回）	利用率（%）
5/30～6/28	43	45	95.6%
7/1～7/29	39	65	60.0%
8/1～8/19	16	51	31.4%
10/31～11/29	43	89	48.3%
12/2～12/27	52	95	54.7%
1/6～1/27	39	69	56.5%

5月30日から6月28日の間が最も高く（95.6%）、昨年度とほぼ同様である。逆に最も利用率が低かったのは8月であった（31.4%）。なお、昨年度は7月が最も利用率が低かった（48.3%）。2022年度は、お盆時期までセッションを設置したことにより、8月の利用率が低下している。

② 利用者の属性

利用者の所属大学、所属部局、課程、出身、住居は【表4】の通りである（カッコ内は%、件数ベース）。

【表4：利用者の所属大学、所属部局、課程、出身、住居】

所属大学	神戸大学（94.4）、同志社大学（1.3）、その他（2.6）
所属部局 （神戸大学のみについて）	国際文化学（37.8）、法学（15.7）、法学部（2.3）、経済学（13.8）、経営学（9.7）、人文学（6.0）、国際協力（5.0）、人間発達環境学（4.6）、グローバル教育センター（3.2）、工学（0.9）、農学（0.9）
課程	修士（45.5）、博士（20.3）、研究生（10.4）、学部（3.5）、交換留学生（2.6）、教員／研究者（16.5）
出身	中国（70.6）、台湾（18.6）、韓国（5.2）、その他（5.6）
住居	兵庫国際交流会館（6.5）、その他（93.5）

利用者の特徴として、ほとんどが神戸大学所属であった。利用者の大多数を占めるという点は例年と同じ傾向である。神戸大学以外の大学では、同志社大学、関西学院大学、兵庫大学、神戸市外国語大学の学生の利用があった。専門分野についても例年と同様、人文・社会科学系が中心であり、いわゆる理系の利用は少ない。課程では学部生が少なく、相対的に博士・修士・研究生の利用が多いことは例年通りだが、今年度は「教員／研究者」の利用が伸びている。以前大学院生だった利用者が、その後も継続して利用したことによる。出身については、多い順に中国、台湾、韓国となっている点、昨年度と同様である。その他の地域からは、フランス、ベトナム、トルコ、オーストラリア、チェコ、ミャンマー、ロシアといった地域からの利用者もいた。

③ 課題の性質

ラボに持ち込まれた文章の種類は【表5】、文章の段階は【表6】の通りである。各期、申込時の入力件数ベースで割合を出している。

【表5：文章の種類】⁵

文章の種類	前期 (%)	後期 (%)	通期 (%)
修士論文	21.4	30.1	26.6
投稿論文	14.3	21.7	18.7
その他の文章 (研究計画書)	22.4	13.3	17.0
博士論文	9.2	14.7	12.4
発表資料	8.2	11.2	10.0
講義・演習のレポート	10.2	6.3	7.9
日本語の授業の作文など	12.2	1.4	5.8
卒業論文	2.0	1.4	1.7

【表6：文章の段階】

文章の段階	前期 (%)	後期 (%)	通期 (%)
ほぼ完成	52.0	53.4	52.8
途中	42.9	45.9	44.6
アウトライン	5.1	0.7	2.6
ブレインストーミング	0	0	0

通期で見た場合、「修士論文」が最も多いことは例年の傾向である。神戸大学の修士院生の利用が多いことによると言える。

前期と後期での違いについては、後期では「その他の文章 (研究計画書)」「講義・演習のレポート」「日本語の授業の作文など」の割合が減り、「修士論文」「投稿論文」「博士論文」の割合が増加している。後期に大学院レベルの学位論文が増えているのは例年の傾向である。

文章の段階は全体では「ほぼ完成」が52.8%、「途中」が44.6%であり、昨年度と似た割合である。作成初期段階での持ち込みが少ないのも同様である。また、表外の情報として、課題の文字数の平均値は、前期は約9538字、後期は約19419字であった⁶。後期の方が増えたことは昨年度同様である。文章の種類の前期と後期とでの傾向差と連動していると言えるだろう。なお、前期・後期ともに、昨年度平均値より多い。

⁵ 後期は、「文章の種類」を複数選択できるようにし、実際複数選択されたセッションがある。

⁶ 申込時の文字数・ページ数入力を基にしたものであり、ページ数での記入や不明確な回答、無回答のデータについては除外して計算している。「4000字から5000字程度」のように幅を持って示された字数データについては、その平均値で計算している。

④ セッションにおける検討事項

セッションにおける「利用者の検討希望箇所」（セッション件数ベース、複数回答あり）を【表7】に、「実際に検討した点」（セッション件数ベース、複数記入あり）を【表8】に示した。

【表7：利用者の検討希望箇所】

利用者の検討希望箇所	前期 (%)	後期 (%)	通期 (%)
構成	36.7	23.9	29.3
内容	37.8	25.4	30.6
表現	81.6	88.8	85.8
文法	93.9	90.3	91.8
引用・参考文献	22.4	8.2	14.2
その他	4.1	0.7	2.2

【表8：実際に検討した点】

実際に検討した点	前期 (%)	後期 (%)	通期 (%)	
文章全体の骨格	ブレインストーミング／アウトライン	4.1	2.2	3.0
	文章全体のテーマや問い	4.1	4.4	4.3
	構成と構成要素	19.4	13.4	15.9
段落や文の関係	パラグラフ・ライティング	7.1	6.7	6.9
	内容(複数の事柄の関係／段落や文の抽象度)	26.5	12.7	18.5
	接続表現	25.5	21.6	23.3
一つの文や単語の問題	キーワード／語句の明確さ	48.0	38.8	42.7
	学術的文章表現	51.0	31.3	39.7
	一文一義／主述のねじれ／文の長さ	38.8	50.7	45.7
	その他の文法的事項	66.3	68.7	67.7
引用・参考文献	15.3	7.5	10.8	
その他	21.4	9.7	14.7	

【表7】の「利用者の検討希望箇所」は、利用者が申込時に記入した内容であり、【表8】の「実際に検討した点」は、チューターがセッション終了後に「まとめシート」に記入した内容である。それぞれの記入項目は完全に対応しているわけではなく、「まとめシート」の方が細分化されている。例年通り、「表現」「文法」が利用者の検討したい項目として人気であり、前期・後期ともに9割前後のセッションで希望されている。実際に検討された箇所としても、「表現」「文法」の問題におよそそのまま対応していると考えられる「一つの文や単語の問題」レベルのものと「接続表現」が多い。

前期と後期との違いに関しては、利用者の検討希望箇所について、後期で「構成」「引用・参考文献」

がある程度減っている。実際の検討箇所については、「構成と構成要素」「引用・参考文献」もそれに伴って若干減っていると言えるかもしれない。「内容」「学術的文章表現」「その他」がやや大きく減り、代わりに「一文一義／主述のねじれ／文の長さ」がやや大きく増えている。この辺りは、持ち込まれた文章の性質だけでなく、チューターが文章の問題をどのように捉えたかも関わるところであると考えられ、各項目の割合の増減について、要因を即座に見出しがたい。

⑤ ラボを知った経緯

利用者がラボを知った経緯については【表 9】の通りである。

【表 9：ラボを知った経緯】

経緯	前期（件）	後期（件）
G-Navi のウェブサイト	1	5
ポスター・チラシ	6	2
学校からのお知らせ	14	15
先生から	11	9
友人・先輩から	7	9
その他	5	0

「学校からのお知らせ」「先生から」が多く、次いで「友人・先輩から」が多い。

3. 利用者アンケート

ラボでは、セッション終了後、利用者に任意でアンケートの回答をお願いしている。今年度の回収数は 166 件（前期 50 件、後期 116 件）、回収率は 73.1%（前期 52.6%、後期 87.2%）であった⁷。昨年度通年の回収率 64.0%に対し、今年度は 9.1%伸びた。特に、昨年度は前期 63.3%、後期 64.4%と学期で差がほとんどなかったが、今年度についてはなぜか前期と後期で差が大きい。質問項目および回答結果は本報告書末の【資料 1】を参照されたい。

尺度選択の結果傾向は、例年通りおおむねポジティブな回答が多い。「1. 今日のラボは、役に立ちましたか？」という質問に対して「とても役に立った」「役に立った」と回答した人には、「何が一番役に立ちましたか？」という自由記述質問を追加で設定しているが、「文法や表現を自然に修正できた」という旨のコメントが目立つ。その他にも「構成」や「内容」と記入している回答や、「一緒に考えられた」という旨のコメント、「字数を削れた」「引用に関するコツを教えてもらった」という旨のコメントもあった。ただし、但し書きで、「言い換えを求められても難しい」というコメントもあった。

記述欄では、前年度同様、「セッションの時間を長くしてほしい」という意見や、「セッションの時間が短く感じる」「文章を事前に読んでおいてほしい」といった意見があった。「もっと早く進めてほしい」あ

⁷ なお、実施セッション件数自体は前期 98 件、後期 134 件だが、前期に 4 回、後期に 1 回、例外的に「2 コマ連続のセッション」を実施したので、前期の分母は 94、後期の分母は 133 で計算している。

るいは「もっと効率的に進めてほしい」といった回答もあった。また、「文章全体のロジックに関するアドバイスがほしい」「チューターにもっと自信を持ってほしい」という回答もあった。他には、「同じ専攻のチューターに見てもらって専門的なアドバイスを受けたい」という趣旨の回答があった。なお、セッションの良かった点や「特になし」、チューターへの感謝を述べる利用者もいた。

4. チューターの振り返り

本節では、2022年度の前期と後期の学期末ミーティング内容をまとめる。このミーティングでは、各チューターが事前に作成した「ラボの振り返り」をもとに、その内容を他のチューターと共有し、意見交換を行った。以下では、前期と後期について、チュータリングの技能面と運営面という二つの項目について、ミーティングの議論をまとめる。その際、適宜「ラボの振り返り」およびミーティング議事録からチューターのコメントを抜粋して紹介する。

4. 1. 前期の学期末ミーティング

まず、2022年度前期の学期末ミーティング内容についてまとめる。参加者はチューター5名、教員1名の、計6名であり、対面で実施された。

① チュータリングの技能について

まずほとんどのチューターが各チューターそれぞれに自身のチュータリング技術の向上を実感していたと同時に課題をもっていた。ただしその内容は各チューターで異なるものだった。これにはチューター経験の多寡が関わっていきよう。しかし、チューターが向上したとも課題とも感じているスキルという点からみると、チューターが比較的共通した技術・技能をチュータリングのなかで意識していることがわかる。あることができるようになったと感じるチューターもいれば課題だと感じるチューターもいる。ここでは大きく4つの点、A. 利用の意図および文章の全体的で巨視的な観点からの把握、B. 利用者主導のチュータリング、C. 文法事項の知識をはじめとしたチューターの説明力、D. 時間感覚についてチューターが感じていることをまとめたい。

第一の点に関しては、昨年度の報告書にもあるように比較的恒常的な課題として挙げられてきたものである（杉原他 2021: 20）。これを課題としているチューターは、「文法的な誤用や不自然な言い方」には対応できるようになったが、段落内での議論の展開、段落ごとの関係性といった「文章全体に対する指摘やコメントはほとんどできていない」としている。別のチューターも「構造やパラグラフライティングなど、巨視的な観点で文章を検討すること」を課題としている。しかしこうした課題を克服しつつあるチューターもいる。たとえば「文章の構造や組み立てを、話を聞きながら整理することが少しずつできるようになってきたように思う」というチューターの声があった。また「できるようになったこと」として「文法や表現に問題がないか検討する際に、全ての問題を見つけて指摘しようとするのではなく、重要度の高い問題を中心に検討すること」を挙げているチューターもいた。ここにも巨視的な視座から問題の重要度を検討する姿勢がチューターのうちにあることを示している。ただしこのチューターが課題として、「2~3段落程度ではなく、1ページを超える程度の分量を一度に読み、その文章の内容を記憶し、どこに問題があるかを考えること」を挙げていることを踏まえると利用者文章の議論の展開や内容を追

うのはやはり容易ではないといえよう。

第二に利用者主導のチュータリングである。「いつもできるわけではない」と断りながらも、「間違いや提案を示しながら、相手が何を意図して書いた文なのか、何を伝えたいと思っているのか聞けるようになった」という声があった。また別のチューターは利用者が喋りやすい雰囲気を作り出せていたとしている。「和気あいあいとした雰囲気や和やかな雰囲気でセッションをしていたといったコメントを観察者からもらった。利用者がやりやすい空気感を出せるようになってきたのかもしれない」としているチューターもいた。さらには「セッション中だけではなく、セッション後の利用者のことを考えてチュータリングすること」を「できるようになった」ことにあげるチューターもいた。利用者が喋りやすい雰囲気をつくりセッションの外での利用者にも気を配ることが重視されていたといえよう。ただし利用者主導にすることの難しさもある。チューターが修正案を出すのではなく、チューターが間違いを説明したうえで「修正の仕方を相手に任せること」を課題に挙げるチューターもいた。

第二のスキルに関わることだが、第三にチューターがもつ日本語文法の説明能力や利用者への伝え方があげられていた。あるチューターは「文法事項について理論的に説明することが難しい。「不自然ですね」という言葉に逃げてしまう」としている。また「修正の仕方を相手に任せること」を課題として、「現状では間違いだが、それがどういう間違いなのか説明できれば、相談者が自分で解決案を示すことができるのではないだろうかと思うことがあった」としている。説明の方法としては、「利用者にわかりやすい日本語を使うこと」を意識していたチューターもいた。たとえば、「～していただけませんか」ではなく「～してください／しましょう／します」などといった表現を使っていたという。しかしその同じチューターはまた説明の仕方に課題も感じていた。「説明の際に一つのアプローチにこだわってしまうことがあったので、多様なアプローチがあるといいと感じた。たとえば、マーカー引いたところの説明にピンと来ていないなど感じたときに、勇気をもって全然別の観点からアプローチする」といった課題を口にしている。

第四に時間感覚である。「終了時刻を意識できるようになった。時刻を過ぎる前に「そろそろ終わりに近づいてきたので…」という切り出しができるようになってきた」という声もあったが、時間の調整を課題にあげるチューターは少なくなかった。「セッションの残り時間と進捗から、大体の到達目標を設定すること」の難しさや「時間超過」が課題とされた。時間感覚をつかめてきたとした先のチューターにとっても「何にどのくらい時間をかける」という配分の見通しはやはり難しい」としている。

② ラボの運営について

ラボの運営については、 α . 定期ミーティング、 β . 広報活動、 γ . 空きコマの活用が大きなトピックであった。

第一に、定期ミーティングの廃止が検討され、試験的に廃止されることになった。経緯としては、パンデミックの影響により 2020 年度前期にミーティングが対面でもオンラインでも行えていなかった。その際の振り返りミーティングにおいて、チューター同士での「利用者情報の共有」と「全体のすり合わせ」が必要になり、2020 年度後期以降、定期ミーティングが行われてきた。しかし、2022 年前期の活動のなかで定期ミーティングの意義が再検討に付された。利用者情報（利用者の研究分野と主題、指導教員との相談内容、日本語チェックについての利用者との人間関係など）の共有は「まとめシート」と「相談事項メモ」上で可能ということになった。また「全体のすり合わせ」については、チラシや HP といったラボ運

営関連の情報共有をする場としての定期ミーティングの場があるという意見もあったが、そうした情報共有の必要性の頻度を踏まえて大きな意義が見出されなかった。結果的に定期ミーティングは廃止されることになった。ただし定期ミーティングを行わないことによる弊害の有無については不透明であったため、試験的に定期ミーティングを行わずにラボ活動を行い、後期の振り返り時に詳しく検討することになった。

第二に、より効果的な広報活動が課題として挙げられた。これはまずラボの利用者を増加させること、そしてチューターを獲得・補充することに関わる。「具体的にはネット検索した際に適切な情報にアクセスできないという問題」が指摘されたり「広報頑張りたい。もう少し多くの人に参加してほしい」という意見がだされたりした。またチューターの増員についても意見が交わされた。課題として「求人票」のようなものがなく、「仕事内容/時給/勤務場所/勤務期間/雇用形態など」を説明しにくいという意見が出た。理想のチューター数として「1日4人、最低限3人」であり、そうすると3人のスタイルが観察できることになる。これらの課題については漸次改善が進められている状況である。

第三に空きコマの有効活用が話題に上り、セッション観察の効果的な利用が提案された。空きコマでの活動目的が曖昧になっていたことが問題視され、活動目的や意義の明確化の必要があるとされた。これに対してセッション観察の有効活用やそれに付随する他のチューターとの文章検討技法の共有が提案された。セッション観察が十分に生かされていないことも指摘され、あるチューターは「良い点のみの指摘ではなく、上手くいってなかったやり取りやさらによくするためのコメントをもらえると嬉しい」としてそうしたことを口頭で伝えてほしいともしていた。「別曜日のセッション観察を見たい」や「画面の使い方見たいところもある」ともされた。また「チューター同士での文章検討技法の共有」をしたいという声もあがった。結果的に、提案されたセッション観察の有効活用や他のチューターとの情報共有の評価については、定期ミーティングの廃止に伴う情報共有の補完というかたちで、後期の学期末ミーティングで扱われている。詳細については次節に記述があるため、そちらを参照されたい。

4. 2. 後期の学期末ミーティング

ここでは2022年度後期の学期末ミーティングの内容についてまとめる。参加者はチューター6名、教員1名の、計7名であり、対面で実施された。

① チュータリングの技能について

以下では、チュータリングの技能面のうち「できるようになったこと」について、ミーティングでの主な議論をまとめる。

第一に、日本語表現・文法に関するアドバイス方法において、以下のように技能向上を実感する声が多くみられた。

- ・日本語母語話者としての感覚的なアドバイスに加えて、日本語文法に基づくアドバイスも少しできるようになった。

- ・ネイティブではない人が日本語を書く時に、どのような点が難しいかを知ることができた。

以上のような意見が多数見られた理由について、ミーティングでは次のような見解が示された。まず、空きコマ時間を利用して、日本語の表現文法の指導の仕方について学んだり、日本語表現文法についての参考資料の活用方法を検討したりしたことが有益であった。次に、チューターの任意で日本語教育論の

授業を履修し、日本語学習者がいかなる教育を受けてきたのかを知ることで、書き手の立場に立ち、より伝わりやすい説明が可能になる。上記二点の見解を踏まえると、留学生を対象としているラボが、今後も日本語文法・表現に力点を置いた活動を行っていくことの意義が確認されたと言える。

第二に、セッションの構成や時間配分がよりよく制御できるようになったという声が目立った。

- ・あまり意識しすぎずとも時間管理ができるようになった。最初にしっかり時間をとって、メ切・原稿の種類・やってほしいこと・目的・分量などを確認するようにしたからかと思う。

- ・利用者のニーズを把握した上で、再度文章をみて、より目標の達成に近い方法がないかどうか、目標の再設定の可能性を考えるようになった。

セッション構成や時間配分で改善を実感しているチューターの共通点として、時間的制約を感じながらも焦燥感を抑えて、セッション冒頭でなるべく丁寧に書き手の要望や状況を把握するよう心がけた点を指摘できるだろう。

第三に、文章の構成やパラグラフライティングなど、文法・表現と比べて大きな問題の扱いである。もちろん、巨視的な問題は引き続き多くのチューターにとって課題であり続けている。しかし4.1節に述べられているように2022年度前期ミーティングでは課題だとする声が顕著だったことと比較すれば、後期ミーティングでは改善を実感する声も目立っていたと言えるだろう。

- ・文章の特徴や締切、提出先などの背景情報を利用者からできるだけ引き出すように心がけることで、チュータリングの視野が広がり構成的な面でのアドバイスができるようになった。

- ・今期は、前後の文のつながりや、パラグラフライティングなど、より広い範囲の問題も扱える余裕を持たせた。

この点についてミーティングでは、セッション序盤での「目標設定」や文章診断を丁寧に行うことが、構成などのマクロな問題に取り組むうえで効果的だという指摘があった。

続いて以下では、技能面のうち「できるようになりたいこと」についてミーティングでなされた主な議論を三点紹介したい。

第一に、利用者からの要望が多い「日本語表現・文法」を検討するのに時間がかかるという課題が議論された。

- ・文法、表現を見てほしいと言われた場合、読むのに時間がかかる。

- ・あるパラグラフにあまりにも問題が多かった場合、どれを残しどれを放置するのかの判断が必要になる。

- ・全部直そうとすると1ページくらいしか進まない場合も。

- ・読むスピードを上げたい。

ミーティングでは、セッション時間が延びてしまう最大の要因の一つに、日本語文法・表現のチェックがあるのではないかという見解が示された。その理由として、セッションの目標を表現・文法に設定すると、「何ページ進んだか」が利用者やチューターにとっての、目標到達度合いの基準となってしまう傾向にあり、チューターの心理としてなるべく進もうとすることや、そもそも文法・表現についての説明に時間がかかることなどが挙げられた。当面の解決策として、時間延長を厭わないことや、優先順位をつけたうえで、すべての文法事項を扱うことに固執しないことなどが提案された。

第二に、書き手の文章などを「褒め」ることが難しいと感じるチューターも少なくないことが判明した。

- ・褒めを具体的にできるようになりたい。
- ・論理的に褒めることの可能なポイントが「文章構成がよい」「ミスが少ない」などの形式面しかなく、しかもそこも別に褒められるほどでもなかった……という場合、ちょっと困ってしまうことがあった。チュータリングにおいて褒めは重要な要素であるという認識はある程度共有されているものの、その具体的な実践に課題があるようである。この点に関して、ミーティングでは、各自がどのような褒めを実践してきたかについて共有しあった。

第三に、書き手のオーナーシップを尊重する点についても、改善の余地を感じているチューターは多いようである。

- ・文章の提出を急ぐ場合や日本語でのコミュニケーションが難しい場合など、どうしてもチューターが主体的に進めていくセッションとなってしまったことがあった。
- ・利用者の主体性を促すような声かけや文章診断ができるようになりたい。
- ・受け身の方への対応に難しく感じました。意見のおしつけになっていないか。

書き手の特性や締め切りとの兼ね合いによって、チュータリングの理念を実践に移すことの難しさがあるようである。この点については、空きコマ時間を利用して、文章診断や日本語表現・文法に関するトレーニングが多かったのに対し、コミュニケーションの技法についてはそのような機会があまりなかったという意見があった。コミュニケーション面についても、チューター同士で話し合う活動の機会を積極的に確保する必要があるかもしれない。

② ラボの運営について

以下では、ラボ全体の運営について、学期末ミーティングでなされた議論のうち、主だったもの二つを取り上げて紹介する。

第一に、定期ミーティングを廃止するという試みの評価である。その詳細な経緯については4.1②を参照されたいが、利用者情報の共有は代替手段を活用できるという2022年度前期ミーティングでの議論を踏まえて、後期では試験的に定期ミーティングを廃止し、必要な情報は勤務時間内に共有することにした。このような変更についてのチューターからの反応は、以下に例示するように概ね肯定的なものだったと言える。

- ・今期は定期ミーティングがなかったが、特に問題は感じられなかった。
- ・セッションの録画観察と「相談事項」のファイルの活用によって、これまでとは大きくは変わらない情報共有ができたのではないか。
- ・他の曜日で出た課題や引き継ぎ事項について、教員を通じて、共有されていたことで運営やチュータリングがスムーズに。

従来定期ミーティングが担っていた情報共有という役割は、Google Document上の「相談事項」ファイルを活用したり、教員が適宜情報共有を行ったりすることによって、うまく補完されていたようである。加えて、新たに始めた取り組みとして録画されたセッションを視聴することで、曜日の垣根を超えて、互いのセッションから学び合うことが可能になった。ただし、別の曜日に勤務するチューターと顔をあわせる機会がなかったことに関して、改善を求める声があったことも補足しておく必要があるだろう。この点、学期初めにチューターが一堂に会する機会を設けるべきだとの意見があった。

第二に、セッション時間に関する利用者の側からの不満である。ミーティングの参考資料として2022

年度後期の利用者アンケートの結果を確認したところ、セッション時間を長くしてほしい、検討のスピードを上げてほしいなどの要望が目立つ、ということが問題視された。以前からチューター間で問題意識は共有されていたが、今回のミーティングでも特に盛んに議論された点であり、引き続き大きな課題であり続けているものと思われる。

その本質的原因の一つとして、チューターと利用者との間の、いわば「認識のギャップ」が挙げられた。すなわち、日本語チェックを求めてラボを利用する書き手が圧倒的に多いのに対し、書き手のオーナーシップを譲るという理念を重視するチューターは日本語の一方的な修正をできるだけ回避するという要請がはたらく。かかる認識上のギャップが、時間不足という利用者の側での不満につながっている可能性がある、ということである。以下に、ミーティングで提示された二つの対策案を紹介する。

一つには、ラボの目的を、全ての利用者、とりわけ初回利用者にわかりやすく説明し、理解してもらうことである。この点、どのようなタイミングで、どういう情報を伝えるべきか、ないし伝えるべきでないのか、さらなる慎重な検討を要することが確認された。

さらなる抜本的な対策として、ラボの多くの利用者の特性（日本語非母語話者、修士・博士・投稿論文の多さ、日本語表現・文法の要望の多さなど）に鑑みると、一回45分のセッション時間という、既存のシステムにこだわり続けなくてもよいのではないか、という意見も出た。国内他大学の文章チュータリング組織では、一回45分程度のチュータリング時間が採用されていることが多いが、日本語母語話者が日本語で書いた文章で、しかもレポートをはじめとする、長くない文章の持ち込みがラボと比べて比較的多いと推測される。そこでラボの特性に合わせて、従来よりも長めのセッション時間を実験的に設けてみることに一定の意義があると思われる。その場合は、その効果が検証されることが肝要であると確認し、ミーティングでの議論を終えた。

5. おわりに

ここまで、「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ」の2022年度の活動について記述してきた。最後に、ライティングラボの運営を担当した教員の立場から、補足情報と、活動の成果および課題、今後の構想について複数取り上げて述べておきたい。

体制について

昨年度は「セッションはオンラインで実施」「チューターもオンライン勤務（在宅勤務）」だったが、今年度前期は「セッションはオンラインで実施」「チューターは神戸大学内勤務」、後期は「セッションは基本的にオンラインだが、金曜のみ対面利用も可能」「チューターは月曜と火曜は神戸大学内勤務、金曜は兵庫国際交流会館1階 Nadacom Station 勤務」であった。事情については2. 2節①の通りである。

ここでは対面利用の受け入れについて少し情報を整理したい。まず、メリット面については、対面の方がオンラインに比べて、チューターから利用者への指示がしやすいという感想がチューターからあった。ラボでは、文章の検討にあたって、Google Drive を利用しており、共同編集ができることや検討箇所の指示等、ツール使用に係る説明が必要となっている。また、文章検討中に文章の検討箇所を指定する際も、直接画面を指し示すことができる。こういった説明について、対面の方が容易であるとのことである。また、会館内のWi-Fiが利用できるのも、利用者の通信状況に左右されないという点も考えられる。

そして、デメリット面については、会館1階 Nadacom Station まで移動する必要がある点が考えられる。

利用率に関しては、2.4節で、オンラインでの利用件数は37、対面での利用件数は15であると示した。なお、対面利用者は、会館居住者ではなかった。「移動のしやすさがどの程度か」「個人で用意できる通信環境がどの程度か」「コミュニケーションのスタイルとして、オンラインと対面とでどのような違いを感じているか」等の複数の要因によって、オンラインで利用するか対面で利用するかが定まってくると考えられるが、実際の対面利用者がなぜ対面利用を選択したかまでは情報がない。

定期ミーティングと利用者情報共有について

定期ミーティングを後期に実施しなかった経緯については、2.2節③の通りであり、そのことに関するチューターからの所感は、4.2節②の通りである。2022年度後期は、「相談事項メモ」と「セッション録画の観察」があったことも要因かもしれないが、定期ミーティングを実施せずともある程度情報・相談事項の共有はできたのではないと言える。引き続きこの体制を維持してみて、反応を見てみたい。ただし、「学期初めにチューターが一堂に会する機会を設けるべきだとの意見」が出たのは尤もだと反省するところであり、予め曜日を越えたチューター同士の関係性のある程度築いてから、学期をスタートすることが望ましいと考える。

利用者のニーズについて

たいていの利用者が「表現」「文法」を気にしていることは、2.4節④からも、例年の傾向からも変わりが無い。この点、チューターの振り返りでも、日本語教育的な知識が活かしたというコメントもあり、一方でどの程度日本語教育的知識を取り入れていくかと迷っている部分も見られた。次年度は空きコマの活動を豊かにしていくという意味も込めて、ある程度日本語教育的知識に触れられる機会を増やしてみ、効果を見てみたい。

また、利用者からのもっと長時間セッションをしたい、あるいはもっと多くの分量を検討したいといった声は依然根強い。可能ならば「2コマ連続のセッション」をある程度積極的に受け入れた場合にどうなるか、次年度試行していきたい。単純にセッションの時間不足が解消されてより良くなるかそうはならないのか、あるいは、「2コマ連続のセッション」が常態化した場合に「チューターへの依存」の問題が出てくることはないか、といった点で見えてくるものがあるのではないかと考える。

利用件数・利用率について

利用件数そのものに対して昨年度と共通して言えそうなのは、8月は利用が少なくなるということと、勤務チューター数にもよるが、たいていの月で利用率には余裕があるということくらいであろうか。前期の最初の月以外は、空きコマが多い。空きコマを有効に活用していく指針を立てる、あるいは空きコマが減るように利用数の増加を目指していく必要が感じられる。

前期の学期末ミーティングで「文法の話は役に立った」というコメントがあり、4.2節では「コミュニケーション面についても、チューター同士で話し合う活動の機会を積極的に確保する必要があるかもしれない」と示している等、留学生に対する文章チュータリングに関する各種知識・技能について、取り上げる余地は様々ありそうである。また、後期の学期末ミーティングでは、チューターから「空きコマがある中で1コマのセッションだけで終わってしまうのは勿体ない感じがする時もあった」というコメン

トもあったのが印象的である。その意味でも、「2 コマ連続セッションの受け入れ」はメリットがあるのではないかと期待ができる。

利用者を増やすという方面では、前期にチューターからの意見も参考にしつつ、通年チラシを作製した。「チラシ自体に言語情報を詰め込んでもなかなか読んでもらえないのではないか」「もっとカラフルにするなど、より目立つようにデザインできるのではないか」といった意見をもらった。次年度は、各学期のチラシにおいてもそれら意見を参考にしたい。

最後に

2022年度は、2. 2節②にある通り、関西学院大学ライティングセンターへチューター4名と教員1名とで訪問させていただいた。本ラボとしては、他のライティング支援組織に触れ、意見交換することでチューターに視野を広げてもらえるのではないかと、刺激を受け活力を得てもらえるのではないかと思ひ、依頼した次第である。盛んに意見交換しあうことができ、ねらい通りになったように感じる。他のライティング支援組織と自分たちとで違いのある部分に触れたことで自分たちを相対化することができただろうし、共通する部分に触れたことで自信を持ったりどこか安心したところもあったかもしれない。また、教員としては体制づくりや広報の工夫などを学ばせていただくというねらいもあったのだが、現地で色々と教えを請うことができ、大変参考となった。

現地で対応くださった先生方、スタッフの方々、教育指導員の方々に改めまして御礼申し上げます。

【参考文献】

- 井上高輔・梶田真生・森田耕平(2020)『留学生のための日本語アカデミックライティングラボ 2019年度活動報告書』神戸大学国際教育総合センター(<https://g-navi.jp/product/pdf/jaw12019.pdf>) (2023年3月13日確認)
- 佐渡島紗織・太田裕子編(2013)『文章チュータリングの理念と実践—早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房
- 杉原健・松元実環・倉橋佑輔・田村豪・土井冬樹・山下泰生・齊藤優・中村徳仁・井上高輔(2022)「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ 2021年度活動報告書」2022年3月31日、神戸大学国際教育総合センター(<https://g-navi.jp/product/pdf/jaw12021.pdf>) (2023年3月13日確認)
- 松元実環・齊藤優・倉橋佑輔・假谷祥子・下中隆太郎・杉原健・山下泰生・森田耕平(2021)『留学生のための日本語アカデミックライティングラボ 2020年度活動報告書』神戸大学国際教育総合センター(<https://g-navi.jp/product/pdf/jaw12020.pdf>) (2021年10月12日修正版) (2023年3月13日確認)
- 森田耕平(2019a)「兵庫国際交流会館における留学生に対する日本語アカデミックライティング支援—「兵庫国際交流会館における国際交流拠点推進事業」の取り組み」『神戸大学留学生教育研究』第3号、pp. 35-60
- (2019b)「兵庫国際交流会館でのライティング支援:神戸大学の取り組み」『大学時報』第388号、pp. 36-43、私立大学協会

【資料1】セッション終了後の利用者アンケート質問項目と回答結果

※1. に付随している「(「とても役に立った」「役に立った」を選んだ人) 何が一番役に立ちましたか?」に対する回答と6. については、第3節「利用者アンケート」で説明することとし、実際の回答データについては割愛する。

1. 今日のラボは、役に立ちましたか?

1. とても役に立った	30+80 件
2. 役に立った	20+34 件
3. 分からない	0+1 件
4. あまり役に立たなかった	0 件
5. 役に立たなかった	0 件

2. チューターとのやりとりを通して、自分の文章に自信がつけましたか?

1. とても自信がついた	9+32 件
2. 自信がついた	36+74 件
3. 分からない	5+10 件
4. あまり自信がつかなかった	0 件
5. 自信がつかなかった	0 件

3. 今日のラボではやりたいことができましたか?

1. 全てできた	26+55 件
2. だいたいできた	22+54 件
3. 分からない	0+4 件
4. あまりできなかつた	2+3 件
5. できなかつた	0 件

4. チューターの指示や説明は理解できましたか?

1. よく理解できた	45+95 件
2. だいたい理解できた	5+20 件
3. 分からない	0+1 件
4. あまり理解できなかつた	0 件
5. 理解できなかつた	0 件

5. あなたの希望 (してほしいこと) や意図 (したいこと) は、チューターに伝わりましたか?

1. よく伝わった	34+79 件
2. だいたい伝わった	13+36 件
3. 分からない	2+1 件
4. あまり伝わらなかった	0 件
5. 伝わらなかった	0 件

6. ラボの改善点や、チューターにしてほしいことなどがあれば書いてください。
(回答割愛)

【資料2】

留学生のための日本語アカデミックライティングラボ ウェルカムシート		
予約日時		
利用者名		
今学期、ラボを初めて利用するか		
文章の種類		
文章の情報	文章のタイトル	
	文章の長さ	
	提出締切日	
文章の段階		
セッションで検討したい点		
セッションの記録へ同意しない場合は、「同意しない」と記載 (金曜利用の場合の利用形態)		
その他特記事項 (チューター記入)		
利用者基本情報		
国籍		
住所		
大学		
所属学部・研究科		
課程		
学年		
専門分野		
ラボ認知経路		

※2022年度後期より金曜のみ対面利用もオンライン利用も可能としたため、記入項目が増えている。

【資料3】

留学生のための日本語アカデミックライティングラボ まとめシート		
セッション日時		2022年 月 日() : ~ :
利用状況	利用者	
	チューター	
	予約	あり/なし
使用言語		日本語/ほとんど日本語/ほとんど英語/英語
文章の問題点と検討の内容		
文章全体の骨格	ブレインストーミング/ アウトライン	
	文章全体のテーマや問い	
	構成と構成要素	
段落や文の関係	パラグラフ・ライティング	
	内容(複数の事柄の関係/段落や文の抽象度)	
	接続表現	
一つの文や単語の問題	キーワード/語句の明確さ	
	学術的文章表現	
	一文一義/主述のねじれ/ 文の長さ	
	その他の文法的事項	
	引用・参考文献	
	その他	
引継ぎ事項		
○指導の補足: 通信環境・使用デバイスの特徴、どこまで検討したか、次回はどこから始めるか、あと何回来られるか、教員からの指示など		
○書き手の能力・意識: 日本語や書き方のレベル・特徴、書き手自身が苦手・不安に思っていることなど		
○書き手の個性・姿勢: 意欲的か、積極的に意見を言い出すか、音読に対する抵抗感、ラボの利用目的など		
○その他		
セッション観察フィードバックを受けた時のメモ		
○気づいた点・所感		

新人研修用

※本シートのねらい：一般用とは違い、セッションの流れを把握するための材料とする。

※新人研修中のセッション観察後に用いる。流れの中で新人が気づいた点を確認し、新人の疑問解消を行なう。

※シートを書いたら、セッション担当ユーザーに共有し、感想や疑問点をぶつけましょう。

※Zoom 内だけでなく、セッション担当ユーザーの横から観察させてもらうもあり。

セッションの日時： 年 月 日

(~)

ユーザー：

利用者：

観察者：

G-Navi 「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ」

セッション観察・振り返りシート

1. セッションの各段階で、ユーザーと書き手がどのような行動・発言をしたか、メモしましょう。気づいた点や疑問点もメモしましょう。

セッションの段階	ユーザーの行動・発言	書き手の行動・発言	気づいた点・疑問点
導入 (自己紹介、ウェルカムシートの確認)			
課題の確認・目標設定			
文章診断・目標の再設定			
文章の検討			
まとめ (これから/次回までにすることの確認)			

2. セッション全体の流れややり取り、雰囲気について、気づいたこと、感じたこと、疑問点を書いてください。

--

※本シートは、担当ユーザーと観察者、その他のユーザーが振り返り用に見て、1人では気づきにくいことに気づき、「うまくできた点を担当者が確認したり他のユーザーが真似したりする」「セッション・ラボの改善点を話し合う」ための材料とする。

※シートを書いたら、セッション担当ユーザーに共有し、感想や疑問点をぶつけましょう。

※Zoom内だけでなく、セッション担当ユーザーの横から観察させてもらうのもあり。

G-Navi「留学生のための日本語アカデミックライティングラボ」セッション観察・振り返りシート（一般用）

セッションの日時： 年 月 日（ ） 時 ～ 時（ ）

ユーザー： 利用者：

観察者：

1. セッションの各段階で、良かった点や上手くいかなかった点、印象的だった点、疑問に思った点をメモし、コメントしていきましょう。

セッションの段階	ユーザーの行動・発言	書き手の行動・発言	コメント
導入 (自己紹介、ウェルカムシートの確認)			Ex. 「利用者の考えをスムーズに引き出せていて (Good/OK/真似したい) !」 「和やかな雰囲気で作れた」 「...という意図のある質問をわかりやすく伝えられていた」 「利用者にはたらきかけの意図が伝わっていなかったかも」 「時間がとてもかかった」 「この質問の意図は？」 「この時、利用者は何を考えていたんだろう？」
課題の確認・目標設定			
文章診断・目標の再設定			
文章の検討			
まとめ (これから/次回までにする ことの確認)			

2. セッション全体の流れややり取り、雰囲気について、気づいたこと、感じたことを書いてください。

--

留学生のための

日本語アカデミック ライティングラボ

オンライン
無料

JAPANESE ACADEMIC WRITING LAB FOR INTERNATIONAL STUDENTS

2022 2022
5 / 30 (月) ~ 8 / 19 (金)

毎週 月・火・金 曜日

- ① 16:00 ~ 16:45
- ② 17:00 ~ 17:45
- ③ 18:00 ~ 18:45

対象：兵庫県下の大学等の留学生で、
日本語で学術的文章を書く人

留学生の **日本語ライティング** をサポート！

日本語の学術的文章の書き方を、日本人大学院生
チューターが1対1でアドバイスします。

【サポートする文章】

日本語の授業の作文 / 講義・演習のレポート /
論文（学位論文、投稿論文） / プレゼンの資料 /
その他の文章（研究計画書など）

※エントリーシート・履歴書などは扱いません。

※文章の添削サービスではありません。

- This program aims to support international students who write academic papers in Japanese.
- Tutors work with you in 45 minute one-to-one sessions to improve your paper/writing.
- Sessions will be done mainly in Japanese but we also welcome elementary-level learners who write Japanese sentences.
- If you would like to get advices on your paper written in Japanese while speaking English, please contact us above. We will offer you other services or opportunities.

実施方法：Zoom を使用したオンラインサポート (1回 45分)

申込方法：フォームに必要事項を入力してください。

<https://g-navi.jp/project/03/jawl22f/index.html>

利用方法：1. 上のフォームに必要事項を入力して予約してください。

2. 何度でも利用できますが、予約は一度に一回だけです。

3. セッションは1日1回 (45分) までです。

4. 日本語で書いた文章のファイル (Word など) を準備してください。

5. Zoom を使用します。ネット環境やカメラ、マイク、スピーカーを準備してください。

※詳細については、ホームページおよび予約後の案内メールを確認してください。

問い合わせ：神戸大学グローバル教育センター 井上高輔 INOUE Kosuke

k-inoue@person.kobe-u.ac.jp Tel: 078-803-5280



留学生のための

日本語アカデミック ライティングラボ

無料
FREE

JAPANESE ACADEMIC WRITING LAB
FOR INTERNATIONAL STUDENTS

2022 2023
10 / 31 (月) ~ 1 / 27 (金)
毎週 月・火・金 曜日

- ① 16:00 ~ 16:45
- ② 17:00 ~ 17:45
- ③ 18:00 ~ 18:45

月・火曜日はオンラインで実施します。
金曜日はオンラインと対面のどちらかを選べます。

対象：兵庫県下の大学等の留学生で、
日本語で学術的文章を書く人

留学生の **日本語ライティング** をサポート！

日本語の学術的文章の書き方を、日本人大学院生
チューターが1対1でアドバイスします。

【サポートする文章】

日本語の授業の作文 / 講義・演習のレポート /
論文（学位論文、投稿論文） / プレゼンの資料 /
その他の文章（研究計画書など）

※エントリーシート・履歴書などは扱いません。

※文章の添削サービスではありません。

- This program aims to support international students who write academic papers in Japanese.
- Tutors work with you in 45 minute one-to-one sessions to improve your paper/writing.
- Sessions will be done mainly in Japanese but we also welcome elementary-level learners who write Japanese sentences.
- If you would like to get advices on your paper written in Japanese while speaking English, please contact us above. We will offer you other services or opportunities.

実施方法：オンライン（zoom）または 対面（兵庫国際交流会館 1 階 Nadacom Station）

申込方法：フォームに必要事項を入力してください。

<https://g-navi.jp/project/03/jawl22l/index.html>

利用方法：ホームページおよび予約後の案内メールを確認してください。

お問合せ：神戸大学グローバル教育センター 井上高輔 INOUE Kosuke

k-inoue@person.kobe-u.ac.jp Tel: 078-803-5280





「研究計画書を書いたけれど、
日本語の表現が不安…。」

「日本語の修士論文って、
どうやって書いていけばいいの…?!」

「日本語のレポート、何を書こう？」

こんな悩み、ありませんか？

『アカデミックライティングラボ』なら、
日本人大学院生チューターと
1対1で相談できますよ！

兵庫県の留学生なら
誰でも利用できます

留学生のための

日本語 アカデミック ライティング ラボ

Free
無料

詳細はこちら →



お問合せ：神戸大学グローバル教育センター 井上高輔 INOUE Kosuke
E-mail: k-inoue@person.kobe-u.ac.jp Tel: 078-803-5280